

今日の説教のポイント<使徒言行録 13 章 1-4 節>

①私たちの伝道の業は、神様が押し進められるもの。

新しくできたアンティオキアの教会から、初めてパウロとバルナバが伝道に送り出されたときの様子が記されています。一番特徴的なことは、神様がイニシアチブ（主導権）をとっておられることです(2)。私たちは、ともすれば、「私が - 伝道しなければならない」と考えがちです。しかし、宣教は神様の宣教なのです。パウロは、自分はやる気満々な時に伝道を妨げられる経験（癩癩という説も）を通してこのことを知らされました。その中でまた、大きな恵みも経験したのです、「私が弱いときにも、神が強い」ことを知らされる恵みを（Ⅱコリント 12：10）。

②宣教、それは福音の恵みを深く覚えさせられた中で起こるもの。

教会の伝道者の送り出し(宣教)がアンティオキアの教会から始った、と聖書が記していることは大事です。迫害されて散らされてもキリストの福音を語らずにはおれなかったアンティオキアに來た人々。福音を聞く人の数が多くなる中で、それで良しとはせず、パウロたちの教えを謙虚に受けた人々。その彼らが礼拝している時に、パウロらを伝道に派遣するように「聖霊が告げた」というのです。ここで不思議な情景を思い浮かべる必要はありません。彼らが、「すべての民を私の弟子にしなさい」（マタイによる福音書 28：19）という主イエスの教えを深く聞き取ったことが大事なのです。福音の正しい、深い理解。これが大事です。

③福音の恵みの大きさを知る。これが力強い宣教をなせる理由。

石巻生まれの作家辺見庸氏が、「心の時代」の中で、あの津波で全て失われた絶望の中で何に希望が見出せるかを問うていました。カミュの小説「ペスト」の中で、人がバタバタ死んでいく中で主人公の医師が絶望に立ち向かう誠実さの中に希望があるのではないかと。世界が、外面が壊された中で、なおそれを通して人間が内面を築いて行こうすること、そこに希望があるのではないかと語られていました。私は聞きながら、イエス・キリストの福音を思い巡らしていました。自らを犠牲とされる姿を通して、私たちに深く自分と世界を見つめ直させ、しかも神による再生の道を示される恵み。ここに宣教を押し進める源があるのです！